

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長 荒谷卓

今回は感性の修養とリーダーの資質について考えてみたい。

「感性」とは、「無意識」の領域の認識能力であり、それが、自己の意識の中である確証を得たものを「悟性」と呼ぶ。それをさらに言葉として普遍化させると「理性」に至る。理性まで行くと明確に「意識」の領域において、自己の経験に基づいた感性と悟性を他者に伝えることが出来る。

修行としての武道は本来、感性を鍛えて悟性まで高めるプロセスであった。感性を鍛錬して悟性を二つの終着点と捉えるのである。

日本の文化は、武道に限らず感性と悟性を重要視する。西洋では、理性を高位に位置づけるが、日本では、感性や悟性の未熟な者に、自己の修業体験から得たものを言葉で正しく伝えることは困難と考え、また、言葉より実行で示すことが大事とする傾向が強い。

柿本人麻呂の歌に「葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国」とあるが、

かは分らないが、聖書に変わって、「人權」と「理性」と「科学」が排他的正当性を勝ち得て、神格化されることとなった。これは、日本人の感覚からすれば、やはり、推論の範疇である。

神道的に考えるならば、キリストを信仰するのであれば、キリストを祭り、各人がキリストの心と直接対話すればいい、ということになる。ただしそのためには理性ではなく感性が作用しなくてはキリストを感じることは出来ない。そこで日本人は、修練という「行」を通じて感性を磨き、神の心や自然の天理を感じ取ることに重きを置き、感性を鍛錬して悟性に辿りつくことを目指したのである。

悟性に辿りついた後は、理性により、言葉として理論化するより、正しいと確信した事は実践して範を示す。これは日本において、少なくとも武士の時代まで続いていた思考と行動のパターンであった。

感性で探り、悟性で理解し、理性は行動で示す。さらにまた、その行動を通じて感じ得たものから、さらに高い悟性に至り、次なる行動に繋げるといふパターンを繰り返していく。武道は、この思考と行動のパターンを凝縮した実践倫理の「道」と言える。

武家の統治の時代には、リーダーたる殿様の子息にこそ、徹底して武道の修行をさせた。徳川将軍は、柳生のよいうな当代一流の武道家を雇って一般の兵卒よりもはるかに厳しい武道の修行を

神を感じ、宇宙を感じ、目に見えぬものを感じる感性の豊かな人が、それを感性貧乏な知識人に言葉で伝えようとしても不可能だからだ。私自身、武道を指導しているながら、武道で得た体感を人に伝えるのは本当に難しい。言葉で的確に表しようがない。感性豊かなアーティストは、いくらその感覚を表現しようとしても物足りなさを感じるだろう。感動、感情を言葉にするとは陳腐化する。日本の男性が、ことさらに「愛しているよ」等といわないのもそのような感性の豊かさゆえだと思う。

仏教には経書を書くという理性的な面があるが、もっとも重要視されているのは、やはり感性から悟性への領域であろう。悟性とはいわゆる「悟り」のことだが、感性を修養しなければ悟性には至らないと考えられ、その修行のプロセスが大事にされている。

武道においても理性の産物である書物が多数書かれているが、そのほとんどは近現代のものである。武道も、基本的には神道と同じで、各人が修練に

したし、ある武家では、教えても分からぬ跡継ぎは、柱に貼り付けて戦場に立て、軍とは何か、政治とは何かを体感させたという話もある。これはリーダーの資質として、感性と悟性の修養をさせることが大事だという認識があったからに他ならない。北条は「禪」を、徳川は「儒学」を武士に広めたが、夫々が生きた学問になりえたのは、武道の修練という基礎前提があったからである。

現代のリーダーの選出・育成の仕方は、文章化した理論や数理のみを学んで、その理解力を持って能力評価がされている。少し前までは、会社の経営者は、どうすれば業績が上がるかではなく、どうすれば会社を正しく運営できるかを熟知している実務経験者が就いていた。つまり、会社の業務経験から感性を高めた者がリーダーになるといふプロセスが存在したが、現在では、機関投資家が決めたCEOが会社を経営する。

行政・司法のエリートも、法規法令の勉強に専念し、理屈の達人にはなるが、日本の精神文化や国民の心情を知る感性の鍛錬が為されていない。政治家は、選挙と政局に明け暮れ、国体観や政治感覚の修練もなま、学者や官僚をスタッフとして頼り、結果として、国家国

よる体感を通じて得るべきものである。昔からあった武道関連の書と言えば「目録」だけである。目録とは師が弟子に対して「これを伝授した」というメモ状の覚書である。その説明やどうやって教えたか、などは切書かれていないのが普通だ。つまり、実際に教授した者同志しか知りえない子相伝の書である。

武道の修行中は、弟子は師から「あれを持ってこい、これを持ってこい」という指示をされる。「あれや」「これ」で師が何を指しているかを感じ取れるような感性を養うためである。師が言う今日の「あれ」と明日の「あれ」は当然全く別のことを指しているが、誰にでも分かるような言葉を使った理性的な指示ではない。こうしたやり取りを通じて感性の鍛錬を弟子にさせていたのである。

武道においてはこのように感性を鍛えて悟性に至ることが本質であり、そちらの方が術技を伝えることよりもはるかに重要だとされた。

民の心情と実態から乖離した輸入物の理論で国家が運営されている。社会がグローバル化するにしたがつて、情報の共有化が進み、理性に依存する領域が拡大することは必然である。しかし、カントが批判しているように、理性も本来は、経験に基づくべきものである。

感性を鍛錬して悟性に至り、そのプロセスを踏まえた上で理性化されたものは非常に意味がある。しかし、文字と数理が、感性と悟性の実証を経ないまま権力を持つと実社会は破壊される。理論のみを根拠にした理論、数理のみを根拠にした数理、これは明らかに推論に推論を重ねたものであり、どんな真実から離れていく有害なものである。業で例えるならば効用小にして副作用大というようなものだ。

本来、国家はもろんのこと、組織のリーダーには、感性のいい人を選ぶべきだ。さらに、長期的な視野に立つならば、子供の頃から、感性を養うことを大事にした教育をしていかなければ、真にリーダーの資質を備えた人物は育たない。昔から武術の腕の立つ者は、和歌の才に長け画書にも優れたものである。感性が優れていたことの証左であろう。

同じように優れた戦略家や政治家もアーティストが多く、すなわち感性が抜きんでて優れていた。そういう意味でも、武道を中心とした感性を鍛錬する修行は、人間形成

日本人の伝統的な思考と行動のパターン。理性とはいわば経験に基づいた比喩・推論の領域である。西洋において、理性を最高位に位置づけた背景はギリシャ哲学や宗教上の理由からだろう。ギリシャ哲学では、徳や神の概念など、神道との類似性もあるが、その意識化の手段として、「ことば」による対話を重視した。ユダヤ・キリスト教の創造主は「ことば」で世界を創造した。かくして「ことば」は徳や神と同化され、言葉にならないものは怪しげなもののみなされた。

米国の思想史で重要な地位を占める「理性の時代」を記したトマス・ペインは、新約聖書を批判して、キリストの言葉を文字にした時点でそれは「推論化」されており、そこには他者の解釈が介在しているとして、脱聖書を説き、また文字化された神を否定し、実在する宇宙の天地万物こそ「神のことば」だとした。これは神道に通じる考え方である。しかし、彼の本意がどう

において、特に指導的な立場に立つ者にとつては不可欠である。感性が貧困だということは、物事の本質を理解する能力がないことを意味している。当然指導者には不向きである。官僚や学者は、過去の経緯を文字で理解することには優れている。しかし、将来に対処すべき指導者に求められる先見洞察力は、文字で理解できる推論の領域を越え、感性を働かせなければ出来ない領域だからだ。

感性を磨く修行はもろん武道以外にも存在するが、武道の場合は自由意志を持った相手と対峙するという状況における感性なので、普通の芸事とは異なっている。武道を通じて養われる、他者の存在を前提とした感性は、本来政治的な指導者には不可欠なものはずである。自由意思を持つている相手と対峙する経験から、間とタイミングという時間的、空間的な勘所と心理的洞察力が養われる。後は、理性による推論の応用力で、戦争にも、政治にも応用できるのだ。武術の達人である上泉信綱を武田信玄が召抱えたいと望んだのも、宮本武蔵を細川藩主が客分として優遇したのも、政治顧問としてであった。

武道を通じた感性の鍛錬を教育の中心に据え、30年後、40年後を見据えた優れたリーダーを育てることは、理性に偏重した現代社会において重要な意義を持つものと考ええる。